# 魔法少女リリカルなのはXーevolution

明星

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

## 注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
魔法少女リリカルなのはＸｌｅｖｏｌｕｔｉｏｎ

【Ｎコード】
Ｎ５０７４Ｌ

【作者名】
明星

【あらすじ】
１１人の選ばれし子供たちがデジタルワールドの危機を救い、あの夏の冒険から半年の歳月が経った。
三人の少年と少女は、自分達の住むイギリスのウェールズに帰国し自分達の家族との平穏な生活に戻った。
そんなある日、メルディアナ魔法学校の校長から任務を言い渡され、世界を渡り歩き自分達の見聞を広めてこいとの内容で三人は家族に別れを言い旅に出る。
旅に出て半年が過ぎた頃に三人の前に全身を覆い尽くすロープを着

た謎の男が現れる。男は三人に青く輝く宝石を渡して目の前から忽然と消える。少年「安倍刹那」が宝石に魔力を流したことで思わぬ事態が起こり、同行していた二人の少女「神楽坂明日菜」と「朱鷺戸沙耶」に彼らのパートナーデジモンを含め、謎の光に包まれ彼らは飲み込まれ世界を越え別世界の地球にたどり着いた。
新たに訪れた異世界にて、セツナ、アスナ、沙耶、そしてパートナーデジモン達が魔法少女達と出会い紡ぎだす、これはそんな少年と少女たちの絆と冒険の物語である。

## ◆第零話「プロローグ」◆（前書き）

デジモンシリーズ×魔法先生ネギま！×魔法少女リリカルなのはのクロス小説です。
少しプロローグを変えて投稿をし直しましたので、誤字や脱字は見つけ次第修正したりします。
こんな作品ですが、楽しんでお読みください。

## ◆第零話「プロローグ」◆

―Ｓｉｄｅ　刹那―

～ウェールズ・ペンブルック州～

ここメルディアナ魔法学校にある校長室にて、オレとアスナと沙耶の三人は学校長に呼ばれ来ていた。そしてとある任務を言い渡された。

「世界を渡り歩き自分達の見聞を広めてこい」との内容の任務を・・・

違うのは、　この試練がオレ達の為に用意されたと言うことらしい。

「大変だろうが、きっと学ぶことは多いはずだ？　三人とも道中気をつけて旅に行って来るのじゃぞ」

「心配しなくても気長な旅を満喫してきますよ♪」

オレは自分の孫の様に心配する校長に向かい微笑みながら言う。

「ありがとうございます！　校長先生」

アスナは今までこの学校で世話になった事を学校長に礼を言う。

「今までお世話になりました」

沙耶も続けざまに礼を言う。

オレ達がウェールズに訪れた時から知るメルディアナ魔法学校の学校長は、その性格が育ての親であるアリカさん譲りであること、さらにナギさんに似た気質も見事継いでいる事も知っていたらしい。

『行ってきます！！』

そう言ってオレ達が駆けていく姿を後ろから見送る校長の目は優しかった。

そして、誰もいなくなった部屋で校長は静かに呟いた。

「いって来るがよい・・・セナとアスナとサヤの三人なら・・・」

「（きっと・・・どんな困難だろうと超えていけるじゃろう）」

とそんな校長の囁きが、風に乗ってオレの耳に聞こえた気がした。

―Ｓｉｄｅ　ｏｕｔ―

―Ｓｉｄｅ　沙耶―

～スプリングフィールド邸・居間～

あたし達は、今日から旅に出るので予め準備していた旅の荷物を居間に置いていたので直ぐにでも出発できたんだけど、あたし達の家族でもありお姉ちゃんのネカネさんは今日旅立つあたしを含む三人の家族に本日何度目かの言葉を絞り出してきたけどいい加減この心配性なの治らないのかしらね。

「三人とも・・・本当に大丈夫なの？」

「うん。平気だって姉さん！」

「だけど・・・」

「はあっ・・・姉さんは心配症だな！」

セツナくんの首にぎゅうっと腕を回して抱きしめるネカネさんはあたし達の中でもセツナくんをすごく溺愛してるけど、いつまで抱きしめてるのかと思ってると目が合った瞬間・・・

ニヤリッ

とあたしの目を見ながらネカネさんは、不敵な笑みを浮かべていた。何だろうその笑みを見た時に胸がモヤモヤとし、あたしがセツナくんに対する気持ちに気付く本の些細なキッカケでもあった。

「三人はワシらの家族であり何よりあいつが育ってあげた弟子じゃぞ。何も心配せずともよいじゃろ」

「スタンおじいちゃん、心配じゃないの？　セツナお兄ちゃんやアスナお姉ちゃんやサヤお姉ちゃんが旅に出かける事が」

赤い髪が特徴のあたし達の弟ネギくんは、心配じゃないの？と首を傾げて一緒に住んでいるあたし達のもう一人のお爺ちゃんでもあるスタンさんを見る。

「ねっ姉さん重・・・」

「ムっ・・・そんなこと言うのはこの口かなぁ～♪」

むにぃぃっ

「Σふへぇッ！？　いひゃいいひゃいよう・・・ねへーひゃんっ（若泣）」

あたしがネギくん達のやり取りを見てる間に、今だきゃあきゃあとはしゃぐあの二人に視線を戻すとあたしの後ろにいたスタンさんは小さく笑って息を吐いた。

「そうじゃな・・・セナはアヤツに似て図太いところがあるしのう」

「アイツってお父さんにセツナお兄ちゃんが似てるの？」

「なっ！？」

スタンさんとネギくんの言葉にショックを受けたのかセツナくんが声を揚げた。

「確かナギさんに似てるとお話を伺ったことはありますから・・・やっぱし似てるんですかっ？」

「オレがナギさんに似てるってどういう意味なんですかっ！？・・・・それに姉さんもそんな事を言われるとオレの心が少し傷つくんだけど・・・はあっ」

と溜息をつくセツナくんだけど・・・

むにーっ！

・・・今だネカネさんにほっぺを伸ばされる状態だから少し笑っちゃうかなセツナくんには悪いけど、アスナも先程から話に参加してなかったけど今は肩を少し震わせて笑ってるわね。

「それもありますけど・・・前を向いて歩けるところ・・・とかが似てますね」

あたし達が笑ってる中で、クスクスとネカネさんも笑ってセツナくんの摘んでいたほっぺを優しく撫でていた。

「・・・しっかり学んできなさい。魔法だけじゃなくて、世の中の事、人の事・・・貴女達の見聞きすること全てが勉強で会う人全てが先生よ。まぁ、半面教師も多いだろうけど頑張るのよ」

『・・・了解（したわ）！』

「うん。心配しないで待っていてお姉ちゃん」

セツナくんとあたしは同時に言い、アスナも心配しなくても大丈夫と元気に答える。

「三人はいつも勉強ばっかりしていたから・・・セナ、アスナ、サヤ！三人ともいっぱい遊んでらっしゃい！おみやげは期待してるからねぇ！！」

「酒を買い忘れるでないぞ！」

にっと笑うネカネさんと酒をせびるスタンさんにネギくんは「お姉ちゃんやスタンおじいちゃんは・・・」と呆れて溜息を吐いてる。

「（その年で溜息を吐くなんて将来苦労する人生を送りそうね。）」

因みにあたしの心の中で囁いたこの一言は、まさか数年後にあたし達も巻き込まれるとは思いもしなかった。

「いっておきますけどスタンさん、三人は未成年ですからお酒は購入できませんよ？」

「ぐっ・・・」

「あははっ残念でしたー！」

そんないつもの様子にあたしやアスナやセツナくんは少し寂しさを感じながら、でも真っ直ぐに一緒に住んでいた家族に笑顔を向けた。

『それじゃ、いってきます！』

「ああ。くれぐれも無茶だけはするんじゃないぞ？」

「行ってらっしゃい！」

「いってらしゃい！！　セナお兄ちゃん！　アスナお姉ちゃん！
サヤお姉ちゃん！」

『・・・クスッ』

なんだかんだ言っても、結局は快く送り出してくれる家族が愛しくてあたし達は照れくさそうに歯に噛んだ。

「・・・それとなんじゃが、アスナにサヤ。もしも不審な男が近づいてきたらコレを使うといいじゃろ」

『・・・』

スタンさんの差し出したものは以前セツナくんが魔法協会からの依頼で、錬金術で作った「アマニータの針，究極のウニ，ケルベロスの角笛，暗黒儀，天球儀，地球儀」等の即死効果や超ダメージ確定のアイテムを満載に詰め込んだ袋を渡してきた。

「容赦は、いらないからのう？（微笑）」

そう言ったスタンさんの表情は、　とてもいい笑顔でしたと後にあたしとアスナは語りセツナくんはジジバカだと囁いた。

後、ネカネさんからはあたし達の好きな好物アップルパイを渡されネギくんからも手作りのお守りを色違いで三人分渡されて、何でも此処には見送りに来れないアーニャちゃんと一生懸命作ったと笑顔で言い嬉しかったのはあたしとアスナとセツナくんの秘密です。

ｔｏ　ｂｅ　ｃｏｎｔｉｎｕｅ．．．

## ◆第零話「プロローグ」◆（後書き）

こんな作品ですが、これからも応援よろしくお願いします。

## ◆第壱話　「必然」◆

―Ｓｉｄｅ　刹那―

オレ達がウェールズを旅立ち一週間。

結局、スタンさんから渡されたアイテム袋は取りあえず三人で均等に分けて携帯するコトになりそんなに攻撃アイテム類を使うことなど無いと思っていたのだが・・・

「・・・何気なく戦闘で数回も使用しちゃたけど・・・」

アスナは手の中にある”テラフラム”を見て溜息をつく。

※このアイテム効果は、相手に火ダメージ＆ａｍｐ；超大爆発ダメージを与える。

オレ達の目の前には真っ黒焦げ姿をした盗賊紛いの数人もの男がいる。そして後ろには白目をむいて痙攣しているチンピラ風の優男や氷像にされた魔法使い達の姿も見受けられる。

前者はアスナの持つ”テラフラム”の餌食になり、後者は沙耶の持つ”轟雷針”の効果で痺れ＋マヒ状態になり残りの半数はオレの右手に持っている何の変哲もない”アイスピック”で氷漬けにしてや

った。

「別にいいんじゃない？　使える物は何だって使うのがあたしのクオリティだしね♪」

「それにこんなことわざもあるだろ。『終わりよければ全てよし』ってね！！」

オレと沙耶は、「アスナに気楽に行こうぜ♪」と言うような感じで励ました。

因みに何故オレ達三人が盗賊退治をしているのかと言うと街道沿いを歩いて次の町を目指していたのだが、途中で今時珍しい盗賊に遭遇し「身ぐるみや金銭を置いていけ！！」と言われたが別に対した強さのない奴らじゃないかと思ったので、速攻で終わらせようとして懐から”アイスピック”を取り出し地面に刺し相手が魔法を唱える前に瞬時に凍らせた。

　これには盗賊達もビビったようで、　盗賊の方もオレ達の格好を見て魔法使いと従者だがまだ子供であろうから対した実力もないだろうと判断し彼らの中にも魔法使いが数人おり、子供三人くらい軽いものだと思っていたようだ。
少し力が強かったり、ちょっとした攻撃魔法や捕縛魔法が使える程度だろうと・・・ニヤニヤと笑いながら彼らはラクに構えていたがいざ戦ってみると自分達が地に伏せていたのだ。
それも僅か３０秒で勝負があったのだ驚いてもいるだろうが、オレ

とアスナと沙耶をそこらの子供と思って舐めていたのが敗因の一つでもあるが実力（レベル）を誤っていたとオレは思うけどね。

開始早々逃げる間もなく半数がオレの技の一つ「フリーズ」の餌食になり、この技は冷気を操り、その次に周囲の相手を確認して一気に地面に”アイスピック”を突き刺し敵を瞬時に固めるコトができるのだ。

それ以外の奴らはアスナと沙耶の二人がアイテム袋から取り出した”テラフラム”と”轟雷針”の餌食となった。

「・・・そう言えばなんか・・・威力がハンパじゃなかったような・・・？」

「何で威力が倍以上だったのかしらね？」

使った攻撃アイテムが通常の倍の威力であったことに疑問を浮かべるアスナと沙耶　。

「　（まさかスタンさんの”怨念”か”呪”のどちらかが籠められていたのか・・・？）」

ゾッ

少し冷や汗をかきブルブルと頭を振ってから”アイスピック”を懐に仕舞い携帯電話で魔法協会に掛けて気絶している盗賊の連行を頼んだ。

そしてこの時以来オレはスタンさんが渡してきたアイテムを滅多なことがない限り使わないと心に決めたりした。

―――

―――――

―――――――

旅に出てから3ヶ月程経過した。

「・・・ハァ・・・疲れたなぁ」

「そうね。ここ最近は、訓練や勉強の毎日だったものね」

「でも久しぶりに遊んだし、何よりも季節外れの花火をした時は楽しかったわ」

オレ達は庭がよく見える縁側に座り雲を眺めながらこの数日を思い返す。

一ヶ月前に日本に到着して関西呪術協会の総本山でもある京都へ寄り挨拶をした後に・・・

「（初日から宴会騒ぎになって挨拶だけじゃあ済まなかったものだから大変だったが・・・）」

オレがココに挨拶しに訪ねたのには理由があり、京都神鳴流剣士でもある関西呪術協会の長「近衛　詠春」に神鳴流を教えてもらう事と訓練をお願いしに来たのだ。

元からナギさんの紹介で紅き翼のメンバーとの面識はあったので、修行や稽古を付けてもらったこともあり、何度か会ううちにオレ自身やアスナや沙耶も彼らに懐いた。

強くなりたいと願うオレ達にとって、彼らはある意味憧れと目標ともいえたのだろう・・・あの人達もそんなオレ達を弟子として以外に自分の息子や娘の様に可愛くてしょうがないらしく、会うたびに魔法や剣の訓練をしてくれたりした。

中でもに、ガトウさんやアルからはマナーや勉強等の教育関係を教えてもらい、ナギさんや詠春さんやラカンには魔法や剣技や必殺技まで見せてくれたりして良い経験を積むこともできた。

話は戻るが詠春さんに頼んだオレの選択は正解だった。
流石に引退しても神鳴流剣士だけはあり、剣の訓練もしているだけあって的確にオレやアスナの弱点や癖をついて指導してくれるのだ。
沙耶には、接近戦での戦いを重点的に指導したらしく彼女的には良い経験を積むこともでき良かったと笑顔で言っていた。

そんな中でココにやっぱり来て良かったと漏らしたオレに　「魔法剣士なのだから、　別にこれ以上剣の腕を上げることはないのでは？」と言われたが・・・以前から悩んでいたコトを話し、　自分の腕をより高めたいと純粋に言い何よりもアスナや沙耶の二人をどんなコトからでも守れる位に強くなりたいと説明すると、詠春さんはオレの考えに同意してくれて、これまで以上の訓練に取り組み真剣に相手をしてくれると言ってくれた。神鳴流の技や奥義をいくつか教えてもらい、何とか習得できたがまだ未完成な技や奥義もあるから取り合えず目的の半分以上は達成した。

そう言えば訓練を見てもらった後、詠春さんの顔に浮かんだ汗と笑った表情はスゴく生き生きしていたのではとオレは思った。

こうして二ヶ月もの間に詠春さんの指導を終えて、次の目的地に何処へ向かおうか考えていたが、詠春さんとの模擬戦や訓練ではあまり勝ち星を取ることはできなかったのが少し心残りと心の中で思ってたりもしていた。

「ふぅ・・・次こそは多くの勝ち星をとってやるぞ・・・っ」

「まぁ。その時はカッコいいところをちゃんと私達に見せてね」

「楽しみにしてるわ」

詠春さんに次はたくさん勝つぞとオレは意気込みアスナや沙耶はオレの様子を微笑ましく見ていた。

あれからさらに半年。

京都で自分の技術をより高めることができたのは何よりも収穫もあったが、詠春さんと話すうちに久しぶりに日本を色々と見たくなりしばらくは体を休めようと二人に相談し、観光巡りと言うコトに決まり日本各地を転々と見て回り様々な名所を巡ったりして、現在”栃木県・日光江戸村”に到着して楽しんでいた。

施設を一回りして昼食タイムに入り、数十分で食べ終わり満足したので最後に”日光華厳の滝”を見てから魔帆良に向かおうと考え、次の場所へ移動するとアスナや沙耶に声を掛けて向かおうとした時・・・

「・・・もし？」

「何だ？」

「はいっ？」

「えっ？」

・・・後ろからオレ達の知らない人物に声を掛けられた。

全身を覆い尽くす黒のマントを纏いフードを深く被っているためか相手の口元しか見えないが、声からするとオレより年上だろう若い男だろうと思ったけど・・・

「（・・・いつの間にオレ達の後ろに・・・）」

「（気配がまったくしなかった）」

「（この人・・・いつから・・・」

オレ達が不振に思い警戒していると、

「こんにちは。少年君にお嬢さん方？」

『えっ・・・あっ・・・はい！こんにちはッ！！』

ペコリっ

オレ達は思わず反応し、慌てて返事をして深々とお辞儀をした。

その様子にロープを着込んだ男はクスクスと笑った。

「すみません、驚かせてしまったようですね。・・・こんな所で何

を？」

「えっと、観光の途中で・・・」

「ほぉそれはそれは・・・まだお若いのに三人だけでご旅行ですか。さぞ大変でしょう？」

「いえ、いろんなものを見ることができて楽しいですし、それに旅の途中で出会う人々が色々と親切にしてくれますから良いものですよ」

そう答えながら笑うと、　彼は薄く笑みを浮かべた。

「やはりよく似ている・・・」

「え？」

「いえ、そういえば貴女方のお名前は？」

この時、オレは嫌な胸騒ぎを感じた。

けどまだそれが何かは分からなかった。

「私は、神楽坂明日菜よ」

「あたしは、朱鷺戸沙耶」

「・・・オレは刹那。安倍刹那です。貴方は・・・」

「・・・神楽坂明日菜と朱鷺戸沙耶と安倍刹那・・・なるほど、君達に合う良い名前だね」

「あの・・・」

オレは、自分達が名乗ったのに相手が名乗らないでオレ達の名前を褒めたことに内心広がっていく言い様のない不安に声を出した。

「（何が・・・こんなに・・・？コイツは・・・一体何者だ？）」

「あぁ、そうそう貴女方にこれを差し上げましょう」

オレが思考を巡らせ様子を窺っていたがロープを着込んだ男はオレの右手に何かを握らせる。

「？」

右手に視線を落とした瞬間オレの耳元で何かを囁いた。

「では、　ごきげんよう。神楽坂明日菜・・・朱鷺戸沙耶・・・安倍刹那。　またいずれ・・・」

『!?』

はっとして顔を上げた時・・・ロープを着込んだ男の姿はどこにもなかった。

「あれ、さっきまで居た人どこに入るのかしら?」

「周りには、見当たらないわね」

「・・・」

オレは無言で手の中の宝石を見つめ、アスナ達も探すのを止めて宝石を見つめた。

「・・・普通に見ると唯の宝石かな?」

「少しだけ強い力を感じるわ」

二人はそれぞれ感じたコトを口にし、オレも二人の意見と同じ考えだ。

この宝石の色は青で、形状は◇型の形をしていて普通の宝石と何ら変わりないものだと普通に見たらそんな感想しか思い浮かばない。

しかし・・・

「（この宝石・・・アスナの言うとおりかすかに魔力を感じたけど・・・？　それに・・・アイツ・・・）」

オレはもう一度周りを見回すが、　数分前まで居た人影はやはり見あたらない。

―「（やはり、　君は彼によく似ている）」―

そう言った時のアイツの笑みを思い出す。

その瞬間背筋がゾクリとした。

冷や汗がでて、　心臓が速く脈打つ・・・

「（何だ・・・一体・・・？　オレは、　アイツの不気味に笑った顔を知ってるのか・・・いや、違う・・・・・・何処かで会って知ってるはず何だ）」

「・・・ダメだ。いくら解析してもお手上げだ」

「そんなに複雑なの？」

「ああ。解析してみたが内部からロックされてるからこれ以上は解析不可能だ！」

「刹那くんでも解析できないなんて、一体何だろうねこれ？」

オレの力を総動員して、解析を試みたが宝石内部に複雑なシステムで構成されていてちゃんとした施設とかではないと詳しく解析できないらしく解析を止めて一息つき再び宝石を見詰めた。

「やっぱり普通に生成された宝石とは何か違うな・・・」

陰陽師としてのオレの感は、よくこんな場面で必ずと言って当たるからこの宝石が普通ではないと気付き小さな違和感を感じた。

少し迷った後。

「悩んでてもしょうがない・・・よし！」

すでに何らかの術式が施されていた為、外部からは魔力を流せば発動するようになっていたので・・・

「（まぁ、発動させれば何か分かるだろう）」

と思い右手に魔力を集中させる。

その瞬間、

『えッ！？』

宝石を発動させたと同時にオレ達三人の体を強烈な蒼い光が包み込んだ。

「――――・・・っと！　なんだよこの光は？」

「ちょっと何なの一体？」

「光が体に纏わりついて動けない！？」

突如、浮遊感に襲われオレ以外にアスナや沙耶も体が思うように動かないようだ。

「チイ・・・ッ」

ミスったと軽く舌打ちした時、　先程のロープを深く被った人物の

声が頭に響いた。

――やはり君達はお人好しだね。こんな簡単な罠にひっかかってくれるなんて・・・面白いくらいにね。あーっはっはっはっは！！！――

その笑い声に頭の中が一瞬白くなり、様々なシーンがフラッシュバックする。

そして意識を失う間際に”アイツ”を見つけた。

「――ルー・・・チェモン・・・ッ！？」

・・・そこでオレの意識は完全に途切れた。

To be continued・・・

## ◆第壱話　「必然」◆（後書き）

ルーチェモンの仕掛けた罠を起動させたセツナ達は、それぞれ異なる場所に転移させられ再会する事はできるのか？
セツナは海鳴市と呼ばれる場所で、後のパートナーの一人でもある白き魔導師の少女と出逢う。そして、目覚めた直後にその世界に居るはずのないデジモンとのバトルをする。
さて次回も楽しんで読んでください。

## ◆第弐話　「出逢い」◆

―Ｓｉｄｅ　刹那―

～海鳴市・海鳴臨海公園・森林エリア～

「（暗い・・・夜なのか？　此処は・・・どこだ？　オレは・・・あの後どうなったんだ？）」

オレは、頭がぼんやりとする中で意識を取り戻し、何とか自分の状態と此処が何処なのか確認する為に起きようとするが、やはり起きられずどうしようかと途方に暮れる。

「セ・・・」

「・・・きて・・・マ・・・」

「（そうだ。あの宝石を発動させて・・・）」

「セツ・・・ってば・・・」

「起きて・・・マス・・・」

「（・・・それから、意識を失って気付いたらココに仰向けでいると・・・）」

「セツナってば！！」

「起きて下さい。マスター！！」

ガクガクガクッ！

「・・・っ」

先程から誰かに呼ばれている声を無視して、頭の中で思考を巡らせていると大きく体を揺らされてるのに今更ながら気付き、耳元の近くで何度も叫んでいた声の方に顔を向ける。

「・・・テリアモン、それにドルモンと若菜とアリエル・・・後はウィル？」

「はぁ・・・。やっと起きたんだね～！」

「お目覚めにしちゃ遅いぜ！！」

「主セツナ、目覚めぬので皆心配しましたが目覚めて何よりです！！」

「マスター、もう目覚めないかと心配したんですよ！ 」

「相変わらずセツナの事になるとアリエルは、周りが見えなくなるよね！ 」

オレの目の前に頭部に1本角を生やし、体全体が白でぬいぐるみの様なサイズに不釣り合いな大きな耳に、そして耳と体の先や首下が緑色の特徴を持つパートナーデジモン「テリアモン」、次に体全体が紫で背中に小さな黒い羽あり額にインターフェースを付けているパートナーデジモン「ドルモン」、その次に体全体が青く両腕に陰陽の太極を描いたナックルガードを身に着けた外見が狐の様な姿をしたパートナーデジモン「レナモン（青）」の愛称：若菜、続いて髪が金髪でその上に海賊ハットを被り体にプロテクターやグローブやアクセサリーを身に着け下半身が漆黒の魚の尾に上半身が人間の姿をした人魚のパートナーデジモン「マーメイモン」の愛称：アリエル、最後に体が黄色で頭にツノを生やし右腕にシルバーリングを身に付けグルルモンの毛皮を被ったのパートナーデジモン「ガブモン」の愛称：ウィルで、半袖タイプのYシャツの右ポケットに入れていた「デジヴァイスNEXT」からいつの間にかパートナー五体が出てきたのか謎だがどうやら先程からオレの耳元で叫んでいたのは、若菜に聞いたところテリアモンとアリエルのニ体だったようだ。

名前：テリアモン

世代：成長期　属性：フリー　種族：獣型

必殺技：ブレイジングファイア［口から高熱の熱気弾を吐き出す技］

プロフィール：ゆったりとした性格で元気のある獣型デジモン。耳の先が三つに分かれていて指のように使える。耳全体を広げると落下速度が遅くすることができる。また戦闘では“炎”の力を操る。双子のロップモンと似た容姿をしており、その生態系は謎に包まれている。また一部のデジメンタルでの進化体が発見されているため、

古代種ではないかとも言われている。セツナのパートナーデジモンの一体であり、「Ｄ－ＫＥＥＰＥＲ」と呼ばれるチームメンバーでもある。さらに生まれが”特殊”である為に通常進化やアーマー進化の二種類の進化が可能で、特殊な”テリアモン”と分類されている。

名前：ドルモン

世代：成長期　属性：Ｄａ（データ）　種族：獣型

必殺技：メタルキャノン［力を込め、口から鉄球を放つ技］
ダイノトゥース［「クロンデジゾイド」で作られたダガーで突く技］
ハイパーダッシュメタル［セツナが「オプションカード：高速プラグインＨ」を使う事で初めて使える技で、ハイパーダッシュしながら鉄球を相手に放つ。力を込めて放つ「メタルキャノン」に比べ突進しながら行うため威力は「ダッシュメタル」の数倍である］

プロフィール：別世界のデジタルワールドから世界を越えてやってきたデジモンで、昔の記憶を覚えていない記憶喪失者である。デジモンが発見される以前に実験用として作られたプロトタイプデジモン。“更なる進化”を求めた第一実験体の「ドルシリーズ」と思われる。額に旧式のインターフェースをつけているのがその理由。伝説上の生き物“ドラゴン”の強い生命力データを「電脳核（デジコア）」の深層部に刻み込んでいるため、強大なデジモンへの進化の可能性があると同時に“戦闘種族”であるデジモン本来の闘争本能が強く、暴れん坊な性格だがバトルの際にはとても頼りになる大切なパートナーデジモンでもある。
セツナのパートナーデジモンの一体であり、「Ｄ－ＫＥＥＰＥＲ」

と呼ばれるチームメンバーでもある。さらに生まれが”特殊”である為に二種類の通常進化が可能であり、特殊な”ドルモン”と分類されている。

名前：レナモン（青）

愛称：若菜

世代：成長期　属性：Ｄａ（データ）　種族：獣人型

必殺技：狐葉楔（こようせつ）［鋭い木の葉を敵に投げつける技］
空中狐葉楔（くうちゅうこようせつ）［空中で狐葉楔を敵に放つ］

プロフィール：スピードで相手を翻弄する狐の姿をした獣人型デジモン。どんな状況下でも冷静な判断ができるようにセツナと共に日々訓練を繰り返している。テイマーとの関係＝絆がその特徴によく反映されるといわれ、幼年期の育て方によっては、他の種族と比べても高い知能を持つようになると言われ格闘技と術を得意としているので、セツナの修行相手によく付き合わされている。また、通常のレナモンと色違いの珍しいデジモンでもある。
セツナのパートナーデジモンの一体であり、「Ｄ－ＫＥＥＰＥＲ」と呼ばれるチームメンバーでもある。

名前：マーメイモン

愛称：アリエル

世代：完全体　属性：Ｄａ（データ）　種族：水棲獣人型

必殺技：チャームプランダー［美しい人魚のような姿を装い接近し、黄金の錨で一瞬にして敵を貫く］
ノーザンクロスボンバー［黄金の錨を乱れ回して敵を粉砕する］

プロフィール：伝説に登場する人魚の姿をしたデジモンで、デジタルワールドでも寒冷地域の海を拠点としていたが砂漠や陸でも活動可能で、簡単な魔法や空中を浮遊できると言う特殊な能力を持った珍しい”マーメイモン”である。また、デジモンには珍しく歌が得意で非常に綺麗な音色で歌い、聞くものを魅了する。しかし、物欲が強くて宝物には目が無いため、他のデジモンが所有しているデータ（宝物）でも魅力を感じると歌で魅了し、その隙に略奪する。その為、ネットの海の何処かに莫大なデータを隠していると噂されているが、以前なら略奪したデータは自分の所有になったとたんに魅力を感じなくなり捨てていたが、セツナのパートナーになってからは集めたデータをセツナにプレゼントをしたりしては、セツナの好感度を上げていると噂されている。アリエルが野生デジモンの大群に襲われた際にセツナに助けられて、戦う姿に一目惚れしセツナを「運命の相手」と称して強引にパートナーとなり、以来セツナ依存症と言うなの病気になり１８０℃変わった性格になった。マスター＝セツナ一筋で、セツナの事になると周りが見えなくなりチームメンバーのリリスとはよくセツナを取り合いし、周辺に被害を及ぼすほどの大惨事を平気で起こす喧嘩を始めるので他のメンバーやセツナが止めないと何時までも続ける。また、セツナを侮辱するモノには黒化し、容赦なくリリスと共に必殺技を相手に叩き込み消去（デリート）するまで止めない。
そして、セツナのパートナーデジモンの一体であり、「Ｄ－ＫＥＥＰＥＲ」と呼ばれるチームメンバーでもある。

名前：ガブモン

愛称：ウィル

世代：成長期　属性：Ｖａ（ワクチン）　種族：爬虫類型

必殺技：プチファイアー［小さな火炎弾を口から吐く技］
プチブレス［大きく息を吸い込み口の中で、炎を限界まで溜めて相手に向けて一気に放つオリジナル技］

プロフィール：毛皮を被っているが、れっきとした爬虫類型デジモン。右腕にシルバーリングを身に付けると言う風変わりなデジモンと噂されている。とても勇敢な性格でグルルモンが残していったデータをかき集めて毛皮状にして被っている。他のデジモンから恐れられているグルルモンの毛皮を被っているため、身を守るための保護の役目もしている。毛皮を被ると常に性格が１８０℃変わってしまう。スパイラルマウンテンの第二層エリアでセツナと出逢い何度も拳を交えて、セツナに興味を持ちピノッキモン戦後にパートナーとして加わった。
そして、ウィルも「Ｄ－ＫＥＥＰＥＲ」と呼ばれるチームメンバーでもある。

「ところで、オレの他にアスナや沙耶の二人を見てないか？」

「セツナ以外は、見てないよ～？」

「右に同じく」

「そう言えば、見かけてませんね？」
「マスター以外は、居ませんでしたが？」
「オレも皆と同じで見かけてない」
「そうか。なら早く見つけに行くか！！」
『そう（だね／だな／ですね）♪』

ココでグズグズしている暇はなく急いで見つけに行こうと皆に声を掛けて、オレの問いに合意し体を動かそうとした直後・・・

『キャアアア～ッ』

と誰かの叫び声が茂みの向こうから聞こえてきた。

―Ｓｉｄｅ　ｏｕｔ―

―Ｓｉｄｅ　なのは―

～海鳴市・海鳴臨海公園・中央エリア～

こんばんは、高町なのはです。

少し前まではどこにでもいる平凡な小学3年生なんですが、異世界から来たフェレットさんのユーノちゃんを助けたことがキッカケで魔法少女を始めました。

私達が、ジュエルシードを封印した直後に大きな姿をしたクモとクワガタとカマキリと小さなクモの集団に突然襲われ、撃退しようと迎え討ちましたが敵の強さは圧倒的でこれまで戦ってきたジュエルシードを取り込んだクリーチャー達とは比べ物にならない強さでした。

戦闘開始から数十分程経ち体力や魔力の消費がハンパじゃなくすでに限界で、足下が少しフラフラするけど目の前の敵から目線を外さないようにしていたら、私の後ろから声が聞こえてきました。

「なのはちゃん」

一瞬誰の声かと思い振り返るとソコにはまさかこんな所で、出会うはずがないと思っていた友達のはやてちゃんがいました。まさかココに居るとは予想できずに唖然と硬直してしまい、そのスキを突いて大きなクモが口からクモの糸を吐いて私に向けて飛ばしてきましたけど、それを何とか避けましたがバランスを崩す事になり体勢を立て直そうと立ち上がると大きなクモの巣に引っかかり体が思うように動かせられません。

フェイトちゃんは、空中で大きな赤いクワガタを相手に奮闘していますが、防戦一方で相手に確実なダメージを与えず苦戦を強いられ回避に専念していましたが、私と同じく体力や魔力も限界だったようで敵の攻撃を防御魔法の上から喰らい防ぎきれずに落下し大きなクモが仕掛けていたクモの巣に引っかかり身動きがとれないみたいです。

ユーノちゃんやアルフさんは、偶然この公園に居た友達のはやてちゃんを小さなクモの大群から守るように防御魔法を展開していて動けないようです。

他にも時空管理局の執務官と名乗っていた年上の男の人は、大きなカマキリと互角に繰り広げて戦っていましたが、途中で大きなクモの吐き出したクモの糸に体を縛られて、その隙を突いたカマキリの放った技をマトモに喰らい気絶をしています。ユーノちゃん達同様に動けないのでこの状況を奪回する術を考えているけど、どうすればいいか思いつきません。

「そろそろオマエ達のジュエルシードを貰うとするか！！」

と大きなクモが話しかけてきました。

「コドクグモン達よ！　コイツ等を抹殺しろ！！」

大きな口を開けて高らかに叫び私達からジュエルシードを奪おうと小さなクモが大群でゾロゾロと押し寄せてくる。私は、恐くなり涙

目になり体が震えてフェイトちゃんも私と同じようになっていて震えています。

『なのは（ちゃん）』

「フェイト」

三人の私達の名前を呼ぶ声が、聞こえました。

「（私・・・ここで・・・死んじゃうのかな・・・）」

私は右手に掴んでいたレイジングハートを落とし、ぼんやりと迫り来る小さいクモ達を見つめる。死ぬ。自分が死ぬ。その事実が目の前にありながら、どうすることもできない自分を見つめていた。

「ああ・・・」

息を吐く。

「悔しいな」

そう自然と口から呟いた。

こんな所で、何もできずアリサちゃんと仲直りできないままやフェイトちゃんともまだちゃんと話すこともできないまま終わるなんて、嫌だよ。
このまま死のうとしている自分が悔しい。そう思うのに体が動かない。動こうとしてくれない。

『キャアアア～ッ』

私は、思わず力一杯叫んだ。
フェイトちゃんも私と同じように叫んだみたいだけど、奇跡が起きるのなら誰でもいいから助けてよ。と心の中で思っていた言葉を声にして再び叫びました。

「お母さん・・・お父さん・・・お兄ちゃん・・・お姉ちゃん・・・誰か・・・私達を・・・助けてよっ！！」

眼を閉じ大好きな家族の名を叫び、空の彼方に向かって声が枯れる位に涙声で叫んだ。
その時・・・

「コールドウェーブ！！！」

ビュッ

「！？」

ビシイッ！！

と誰かの声が辺りに響き、小さなクモ達の悲鳴に鳴らない声が聞こえ閉じていた目を開くと私は氷像と化したコドクモン目の前の光景に思考が停止し、人生の中でこれほど驚きもせずに見ていることができたのは初めてだろう。

絶対零度の凍気と共に白の半袖のYシャツと黒のズボンに青のネクタイを身に着け黒のメガネを掛けた男の子が静かに舞い降りて、私やフェイトちゃん達の周りが氷の世界とかし、彼が空気の動きを止めたように私には見えた。

「・・・・・・キミは？」

私と同い年位の男の子に、私は思わず尋ねた。

「通りすがりの菓子職人（パティシエ）さ、覚えておいて損はないぜ！！」

微笑みながら返答を返す彼に私は何故か興味を持ち心から惹かれたのかもしれません。

これが、私達とセツナ君との初めての出逢いでもありました。

To be continued...

## ◆第弐話　「出逢い」◆（後書き）

いよいよバトル開始、なのは達は「パティシエ」と名乗るセツナの未知の力を垣間見る。
パートナーデジモン達も活躍するので、次回も楽しみにして下さいね。

## ◆主人公設定◆

【主人公主設定】

●名前：安倍　刹那（Ａｂｅ　Ｓｅｔｕｎａ）
●旧姓：神無月　刹那（Ｋａｎｎａｄｕｋｉ　Ｓｅｔｕｎａ）
●性別：男
●年齢：８歳（小学２年）
●誕生日：７月７日
●血液型：Ａ型
●身長：１２６．３ｃｍ
●体重：３０．８ｋｇ
●足サイズ：２２．５ｃｍ
●一人称：オレ
●職業：小学生，魔法使い，錬金術師，陰陽師，仕立屋，菓子職人（パティシエ），テイマー
●趣味：修行．冒険，読書（ファンタジー系，推理物，マンガ）．アイテム作成．ゴーグル集め，ゲーム（アクション系，音ゲー，ＲＰＧ，パズル），音楽鑑賞，洋楽（ハードロック，クラシック）
●特技：剣道，夢見，夢渡り，料理，お菓子作り，服の仕立て，ピアノ，ケンカ，無謀な命令
●好きなもの：家族（アスナ，沙耶，ネギ，ネカネ，スタン，アーニャ，ナギ，アリカ，学園長，アーニャのおじさんとおばさん以上が大切），パートナーデジモン，仲間，友達，師匠，動物（特に犬や猫が好き）
●嫌いなもの：自分自身，命を粗末にする者
●性格：冷静沈着と頭脳明晰と運動神経抜群の優等生タイプ。自分よりも大切な人や家族が最優先。喜怒哀楽がハッキリしている。常に前向きで様々な人や動物ともすぐ仲良くなれるので、仲良くなっ

た相手によく懐かれている。面倒見が良く落ち込んだ人と接触すると無条件で抱き締めてしまうクセがある。
●容姿：漆黒の髪で長さは腰まであり絵元結で纏めている。瞳の色は左が真紅／右が蒼のオッドアイとなっていて、普段は錬金術で制作したカラーコンタクトや眼鏡のどちらかで隠していたりしてセツナ以外の周りの人から見たら瞳の色は黒に見えたりする。コンタクトや眼鏡はその日の気分で付けたりしている。
コンタクトやメガネをしている理由は、昔にちょっとした出来事が原因で装着している。
●口癖『覚悟はできてっか！！？』，『おまえを埋葬してやるよ！』
●好きな食べ物：ハンバーガー類，クレープ＆ａｍｐ；アイス各種，和洋中全般
●嫌いな食べ物：なし
●イメージソング：笑顔の訳／引田香織，約束／木氏沙織
●パートナーデジモン：ドルモン，リュウダモン，マーメイモン，ガブモン，ブイモン，インプモン，テリアモン，リリスモンの計八体をパートナーデジモンに持ちそれ以外に十二神将（デーヴァ）を配下＝朋友に持つ。
●備考：安倍家現当主。今までの歴代当主の中で最も強い力を持ち、多くの言霊を操る事ができる。セツナは5歳まで神のお告げにより家族と離れ、陰陽師の一族である安倍家で過ごしていた。神無月の人達より安倍家の人達と仲がいい。神無月家は１０００年以上続く、言霊を使い妖や鬼を退治る一族。神無月家の人達は本名を名乗らず、偽名を使う。セツナの本名は、本当に心を許し信頼した人にしか教えない。セツナは、家族や前当主の祖父にさえ教えていない。本名の『？？？』もパートナーデジモンとアスナと沙耶とナギとアリカと四聖獣と四聖獣を統べる者と高於の神以上の親しいメンバーにしか教えていない。高い見鬼の才を持っており晴明を越えると言われ、
　潜在能力も高いが”現在”はとある理由で封印中で、自分が本当に護りたいモノと出逢った時に封印を解く約束をある人としている。

また、どんなに気配を隠形してモノでも完全に見抜く見鬼の持ち主。
霊力も安倍晴明以上でもある。

## ◆番外編　「今日にありがとう♪」◆（前書き）

久しぶりの更新です。

今回の話は、番外編と言うことでＡ’ｓ時代から六年後のセツナとなのはの二人が恋人と言う設定で書きました。

是非、楽しんで読んで下さい♪

## ◆番外編　「今日にありがとう♪」◆

―Ｓｉｄｅ　なのは―

～海鳴市・高町家・なのはの部屋～

もう少しで日付のかわる直前、私の携帯が突然メールを受信した。
登録している受信音から、誰が送ってきたのかは分かっている。
携帯を開きメールの一文を読んでみる。

『起きてたらすぐに出てきてくれ』

と言うシンプルな内容で何だか呼ばれている様な気がして、パジャマの上にコートを急いで羽織ると部屋を飛び出した。
私が部屋を出ると時刻は、日付を変えて０時にピッタリとなった。

―――

――――――

―――――――――

家族を起こさないようにそっと家を出ると、門扉に誰かが寄りかかっているのが見えた。

見慣れた後ろ姿に小さく声を掛けると彼がパッと振り向く。

「起きてたか・・・待ちぼうけ食らわずにすんだな」

フッと白い息を吐いたセツナ君に、「こんな時間に外に呼び出してどうしたの？」と尋ねてみた、セツナ君はきょとんと目を見開いた。

「まさか分からずに出てきたのか？」

「ほぇ？　何が？」

「はぁ・・・今日、お前の誕生日だろーが」

言われた言葉に今度は私が目を見開く。そうか、日付が変わって今日はもう私の誕生日なんだと自覚すると、「ホントに分かってなかったのか・・・コイツは、何て言うべきか」とセツナ君が苦笑した。

その笑った顔のまま右手を私の前に突き出してきた。

「ほら」

セツナ君の右手は綺麗に包装された真っ白な箱を持っていた。

青のリボンでラッピングされた箱を、何だろうと見つめると、セツナ君は焦れたように私に箱を押しつける。

「えーと、コレは？」

「誕生日プレゼントだ！いらねぇのか？」

「！？　いる！　いります！」

押しつけられた箱をしっかりと持つ。

大きさの割に少し重いような、そうでもないような長方形の箱は厚みが少ない。

こうなると気になるのは中身で、「開けても良いかな？」とセツナ君にワクワクしながら尋ねる。

「・・・あぁ」

とぶっきらぼうな短い返事が返ってきた。

改めて手元を見る。箱は手作りで、ラッピングも丁寧にされていて

如何にもセツナ君らしかった。

「もしかしたら、私のことを考えながらラッピングをしてくれたのかな？」と思うとセツナ君が可愛く思えた。本人には絶対に言えないけど。箱の下面に貼られたテープを外す。

「何が良いのか分かんなかったから、無難にコレを選んでみたんだ」

「フォトスタンド？」

出てきたのは木枠のフォトスタンドだった。

白くて小さな花が散りばめられた凝った細工がしてある。

この小さい花は…。

「霞草だったかな？」

「・・・花言葉は、『清らかな心』って以前に知り合いから教わった」

「え？」

「すずかに聞いた。なのはにピッタリだろ！！」

セツナ君が柔らかく微笑む。優しい瞳。見つめられて胸の心臓がド

キドキする。顔が赤くなりそうで、話題を変えようと問いかけた。

「ありがとう。でもどうしてフォトスタンドを選んだの？」

「そ、れは・・・」

私の言葉にセツナ君が目線を逸らして言いよどんだ。私じゃなく、セツナ君の頬にかすかに朱が登る。たっぷり十秒程かけて、セツナ君は口を開いた。

「二人だけで撮った写真が少ないから、こんなプレゼントも悪くないかなと思って・・・」

「！　・・・そうだね♪」

出てきた言葉に、すごく嬉しくてフォトスタンドを箱ごと胸に抱えると、セツナ君が近づいてきて抱きしめてくれた。

じんわり伝わる彼の温かさに目を閉じる。

凄く近くでセツナ君の優しい声が聞こえた。

「なのは！！　誕生日おめでとう♪」

誕生日おめでとうって言葉は、生まれて来てくれてありがとうって意味なんだよ。

私が五歳位の頃に、お母さんから聞いたそんな言葉を思い出しながら、前髪を掻き上げて額に触れた熱を、多分私は一生忘れないだろうと思った。

『今日にありがとう♪』

（どの写真を飾ろうかな♪）

（この間のデートで、撮ったツーショットがいいんじゃないのか？）

（良しそれに決まりだね♪）

Ｔｏ　ｂｅ　ｃｏｎｔｉｎｕｅｄ．．．

―

## ◆番外編「今夜のメインディッシュ♪」◆（前書き）

今回も早めに番外編を書き上げたので掲載しますね。

この番外編は、ＳｔｒｉｋｅｒＳ時代のセツナとマテリアル三人娘のほのぼの甘夢で仕上げた内容です。

## ◆番外編「今夜のメインディッシュ♪」◆

―Ｓｉｄｅ　セツナ―

～機動六課・セツナのアトリエ工房～

オレが簡易ベットの上で寝転がりながら、ロロナとの共同で現在制作中のフラム関連の発展型をどう改良するかアイディアを考え、武器や錬金術関連の本をたくさん床にバラバラと置いて呼んでいたら、何処かから派手に何かが割れる音や爆発音が聞こえてきた。

同時にオレの部屋の床に置いていた本の山が崩れ、後で整理しないといけないと内心思う。

今は、一体何が起きたのかと思い膨らませて、爆発音のした方へとオレは進んで辿り着いた先は食堂のキッチンだった。

「わわっ、一体全体何だよ。　この有様は・・・」

プスプスと黒い煙を上げるフライパンに、散乱した真っ黒焦げの食材らしき物体。

割れた皿の破片もあちらこちらに飛んでいる。

キッチンの床には尻餅をついていて顔中を炭で所々汚したセイナと

ライカとアンナの元・マテリアル三人娘がいた。
＊因みにこの三人は、セツナとある契約をしたことが原因で”存在”と”力”を手に入れ「子」と呼ばれるモノに変換されているので、世界に存在することが可能とされている。
この様子から判断して、明らかに原因はこの三人だろう。

「おーい、セイナとライカとアンナ、一体何があってこうなったんだ？」

「えっと、私が最初にキッチンで料理をしていましたら、途中でライカとアンナが自分達も料理をすると突然言い出しまして、現在この様な状態になりました」

「解説ありがとう。セイナ！！」

オレは、解説をしてくれたセイナの頭を撫でながら礼を言うとセイナは一瞬驚きいつもの無表情にすぐに戻るが顔を真っ赤にして気持ちよさそうに目を閉じて嬉しそうにしていた。
それと話を戻すが取り合えずこの惨劇とかした舞台を作り出したであろうライカとアンナの二人に注意をしようとするが・・・

「あっセイナだけズルイよ！！　セナ、僕の頭も撫でてよ！！」

「はいはい、ライカにも後で好きなだけ撫でてやるから今は大人し

くしていよなぁ！！」

「うん♪　約束だよ♪」

ライカに対して子供に言い貸せるように優しく言いそれを元気よく返事で返してくれるこの子は純粋すぎて知らない人によく騙されないかハラハラして神経系胃炎に悩まされる自分を思い返してこれまでの十年間は、大変だったよなと改めて思う。

「さてと、アンナ！　キミは一体全体何をしたらこんな状況を作り出したんだ！！」

「う、うむ！　セナか。いや、見ての通り料理をしていたのだが失敗してしまってな／／／」

「どんな風に料理すれば壁に包丁やお玉が刺さるんだよ！！？」

オレがアンナに質問し、照れた表情でアンナが答えるが思わずどんな方法で包丁やお玉が刺さっているのか物理法則を無視しているとしか思わずにツッコミをしてしまった。

料理なんてオレやはやてやリニスやアイ達がいないと何も上手く出来ないレベルだったと思いだし、シャマルの料理をする時と良い勝負だよ。と思わずに入れなかったので頭を切り替えどうして料理をしようとしたのか三人に聞き出した。

何でもオレが数日前に食堂で、「和食が久しぶりに食べたいな！！」

と囁いていたのを聞き、セイナがわざわざ食堂の人達に頼み込みキッチンに立ち入りを禁じて一人で料理するとはやてに許可を貰い、続けざまにライカとアンナも自分達も料理を作りたいと申し出たらしい。

シャマルよりかは危険きわまりないが、そもそも上手く出来ない事など本人達も承知の筈なのに妙な自信を持ってやったりする上に、失敗しても全くめげずに屈託のない笑顔を見せるから攻めようにも気が削がれてしまった。

「料理ならオレやはやてに任せればいいだろ？」

「何と言いますか！　この間セナが偶には日本の料理が食べたいって言ってたじゃありませんか？」

「それは、確かに言ったけど・・・」

「前に桃子さんとこ行った時に味噌汁の作り方を教えて貰ったんだ。それで是非僕達がセナの為に作って上げたくてさぁ・・・」

「それに我らは、セナに恩返しをしたいと思い料理作りに参加したのだ。二人を責めないでやってくれ！！」

そう言われ、キッチンの上をよく見るとわざわざ日本から取り寄せたのだろう、味噌の入った箱や鮭の入ったビンや海苔が入った袋等が置かれていた。

「しかも赤味噌や紅鮭や味海苔・・・、よく見つけて来たよな」

「あぁ、それはね。セナの住んでた日本ではその味噌が主流だって。シャーリーに頼んで調べてもらったんだ♪」

「アヤツに検索を頼んでのは、正解だったが我が命じて探させた事を忘れるでは無いぞ♪♪」

ニカッとライカとアンナは笑った。

「三人共、頬や指が切れてるぞ」

ポーチから絆創膏を取り出して、三人の頬や指の切り傷の上に順番に貼る。

よく転んだりして怪我をするヴィヴィオの側にいる為、オレは絆創膏をいつもポーチに入れて持ち歩いている。

「少し痛みますが、手当をしてくれましてありがとうございます」

「セナ、絆創膏貼ってくれてありがとう♪」

「まぁ・・・我からも感謝はするぞ／／／」

三人からお礼を言われオレは改めて散らかったキッチンを見て、ま

だ三人が危なっかしい動きをするのではと考えたので殆ど後片付けをオレ一人でした。

「一人で片付けさせてしまい、すみません」

「ごめんね。セナ」

「すまぬな、手伝うことが出来ずに申し訳ない」

「別に気にして無いぜ！　寧ろオレの為に日本料理を作ろうとしてくれた気持ちが十分に嬉しいからな！！」

そう言って笑ってからオレは少し考える素振りをした後、棚から愛用の黒いエプロンを出して身に着けた。

「折角取り寄せたのだからオレがセイナやライカやアンナに日本料理を振る舞うぜ。どうせならなのは達も呼んで機動六課メンバー全員に食べてもらうとするか！！」

新鮮な魚介類、採れたての野菜、調味料。袖を捲り、用意された食材からメニューを考えてオレは忙しくキッチンで動き始めた。

邪魔にならない様にと少し離れたキッチンが見えるテーブルの場所でオレの料理が出来上がるのを待っていた三人は、随分前から漂ってくる美味しそうな匂いにソワソワしていた。

少し前にオレが念話で呼んだメンバーもおおむね集まっている。

「ねぇねぇアンナ、少し落ち着こうよ」

「ライカの言うとおり、料理が出来上がるのを暫し待ちましょう！！」

「分かっているのだが、この香ばしい匂いが我の腹を刺激してガマンできないのだ！！」

苦笑いを浮かべながらライカとセイナがアンナに声をかけるが、やはり落ち着かない。

意を決してアンナがガマンできずにキッチンへ行こうと向かって歩き始めたとき、オレがキッチンから料理を乗せたカートを押しながらやってきた。

「お待たせ！　機動六課メンバー全員の為に最高の料理を作ってきたぜ！！」

カートに湯気を立てる様々な料理を沢山載せてオレが食堂に入ってくると、ここには居ないと思っていた数人のメンバーも途中でキッチンに顔を見せて、料理や皿、ワイン等を載せたカートを運ぶのを手伝って貰いオレの後から入ってきた。

手際よく料理をテーブルに並べ、全員が好きなものを自由に取って食べれるバイキング形式にした。

さながら日本食パーティといったようだ。
初めて日本料理を見る者もいるようで、あれこれ言っているのが耳に聞こえてきた。

「セナが腕によりをかけて日本料理を作ってくれたのだ！　うぬ等、ちゃんと味わって食べるがよい！！」

「ふふっ、アンナ、大げさだぜ」

「お酒は年代物のワインですか？　玉には飲んでみたいですからこれも料理とミスマッチではないと思いますね」

「僕も、ガマンできないからセナ早く飲んじゃだめかな？」

どちらかというと肉より魚料理の多い日本食に出来るだけ合わせて白ワインを用意したんだけど、そんな事を頭の片隅にやりワイングラスを三人に手渡して、そこへイタリア産の高級ワインを注いだ。

『乾杯♪』

グラスが軽くカチンと音を立てる。
何故だか可笑しくなったオレは三人の顔をまじまじと見て笑みをこぼす。

「何がオカシいのですか？」

「何で笑ってるの？」

「何を笑っているのだ？」

「さて、何で笑っているかは秘密だ！！」

『今夜のメインディッシュ♪』

（アイツ等の瞳に乾杯だなんて言うとは、オレらしく無いセリフを言って少し恥ずかしかったのは一生の秘密だ！）

Ｔｏ　ｂｅ　ｃｏｎｔｉｎｕｅｄ．．．

## ◆番外編「Sono sempre accanto a te.」◆（前書き）

今回もふと思いつきで、番外編を書いてみました。

超＞チャオ＜夢って、あまり見かけたことがないので思い切って書き上げました。

時代設定は、真帆良祭が終わってから数日後の話です。

では、どうぞ♪

## ◆番外編「Sono sempre accanto a te.」◆

―Side 超(チャオ)―

～真帆良大学工学部・研究室～

あなたは、ズルイネ。本当は気付いているはずヨ？

「ねえ、セナ」

「何だ？」

「髪をきちんと纏めたらどうヨ」

「ああ・・・すまんな」

そう答えながらもあなたは何もしようとしないネ。

「それと――――」

「今度は、何だ？」

私は胸へと視線を向ける。

「・・・胸元のボタンが外れているネ」

「ああ、そうだな」

溜め息混じりにセナは顎を擦った。

それでもあなたは何もしようとしない。

これから夜の見回りがあるというのにヤレヤレと溜息を吐きたくなるヨ。

髪はぼさぼさで、学生服は乱れていて、昨日もきっと寝ていないネ。

一昨日だって寝ていなかったのに。

ほら、目の下に隈が出来てるヨ。

「・・・セナ」

「どうした？　超＞チャオ＜」

セナは、キョトンとした表情で私に視線を向ける。

「・・・無理しないでネ」

「あ、ああ、超＞チャオ＜。ありがとう」

私の予想外の言葉に少し戸惑ってるように思えたネ。

あなたはいつでも全力で物事に取り組んでる。

そんなあなたの姿を見るのが辛いヨ。

約束や責務を果たそうと、皆の期待に応えようとしているあなたがいつか押しつぶされてしまいそうで怖いヨ。

あなたが壊れてしまいそうで。

でも、玉には周りにも目を向けて。

あなたをいつも心配している私がいることを。

あなたを想っている私がいることを。

私の気持ちに気付いて欲しいヨ。

でも、気付かないで欲しいネ。

あなたの背中に向けて、

『大好きネ！！』

と、心の中で数え切れないほど伝えたヨ。

手を差し延べると、届きそうなのに届かない。

ただ去っていくあなたの背中へ伝えるだけ。

今日もまた私はあなたの背中へ伝える。

『大好きネ！！』

と。

「超＞チャオ＜」

突然振り向いたあなたに私は驚き、思わず目を見開いてしまったネ。

聞こえてしまったカ？

いや、声に出してはいないハズネ。

「そんな驚いた顔するな」

「どうしたネ？　セナ」

「いや、あのなぁ・・・超＞チャオ＜がオレの名前を呼んだような気がしてな。どうやら、勘違いだったようだ」

私は、あの日から心の中で何度もあなたの名を呼んでいたヨ。

あなたにずっと想いを伝えていたネ。

嬉しかった。

いつも一度も振り向くことなく去って行くあなたが、初めて振り向いてくれた。高鳴る胸の鼓動を押さえようと、私は深呼吸する。

そして――

「セナ、あなたに学園祭が終わった日からずっと伝えたいことがあったネ。私は、あなたのことが――」

『Ｓｏｎｏ　ｓｅｍｐｒｅ　ａｃｃａｎｔｏ　ａ　ｔｅ．』

（セナの事が、好きな気持ちは誰にも負けないネ。あの日、暗闇の檻から手を差し伸べて救い出してくれて私の心をも変えたセナは、絶対に誰にも渡さないヨ♪）

To be continued...

## ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n5074l/

魔法少女リリカルなのはXーevolution

2010年11月16日18時38分発行